

On the Interjectional Intonation in Hokuriku District

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5198

北陸地方の間投イントネーションについて

新 田 哲 夫

1 ねらい

北陸地方には、いわゆる「ゆすりアクセント」または「ゆすり」調、あるいは「うねり音調」と言われてきた独特のイントネーションがある。筆者は以下に述べるように、現象面では、音調のくぼみこそがこのイントネーションを特徴づけるものと考え、やや視覚的な言い方ではあるが、「くぼみ音調」と呼んでも差し支えないと考える。機能面では、山口幸洋氏のように「間投イントネーション」と呼ぶことに賛成である。「聞手の注意をひきつけ、たえず反応を確かめつつ、話者自身の余裕を保つ」（山口 1985, p. 216）という見解は筆者の内省とほぼ一致する。

これについて正面から扱った論考は次の3点である。

藤原与一（1969）「越前の一小方言について」『國文學攷』50

吉田則夫（1983）「方言文アクセント」についての一考察『方言研究年報』26（広島方言研究所編，和泉書院）

山口幸洋（1985）「福井方言の間投イントネーションについて」『音声の研究』21

この稿では、福井市方言のそれについて、音声的現象面を中心に筆者（昭和33年3月31日、福井市日の出町生まれ、高校卒業まで福井市在住、大阪府豊中市に1年間居たことがあるが他は金沢市在住、本来は一型アクセントの持ち主）の内省に基づく報告を行なう。また、2つの録音資料、すなわち吉田氏がテキストとして使用された『全国方言資料』第3巻（日本放送協会編，1981）所収の福井県丹生郡織田町^{ニユウ オ ダチヨウ オ イ マツ} 笈松方言、山口氏の話者と同一の方の談話が収録されている『方言談話資料』（4）（国立国語研究所，1980）所収の福井県武生市下中津原町^{タケフ シモナカツ ハラチヨウ} 方言を取り上げ、筆者の方言との比較を行なう。更に、そこで諸氏の説について言及する。また、金沢市方言についても、簡単な調査を行なったのでその記述をし、各方言との比較も行なう。

2 典型的なタイプ

これから述べる典型的なタイプとは、筆者の内省と、録音されている丹生郡織田町笈松方言と武生市下中津原方言とを総合的に考慮して、今後の記述のために、ある枠組みを与えておこうとするためのものである。

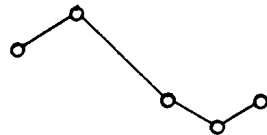
当該音調について、これら3方言の個々の事例を観察したところ、次のことがわかった ((i), (ii)については、金沢市方言にも当てはまる)。

- (i) この音調が現われるところは、諸説のとおり長音化するが、各方言ともその長さは最大2モーラ分で、その範囲内で長音化する。
- (ii) 各方言において、この音調について共通するものは、末尾の長音の上に被さった音調のくぼみなくぼみである。
- (iii) 音調のくぼみを形成する直前に大きな下降のある場合とその下降がない場合がある。

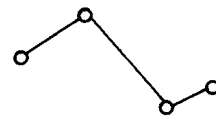
そこで、次のようなA, a, B, bの4つのタイプを設定してみる。これら4タイプは、それぞれが4極をなし、それらが囲む範囲内に、個々の具体的な当該音調が現われると想定するものである。例として、「コレモ」にこの音調を被せた場合を掲げる。使用するカギの意味をそえる。

図1

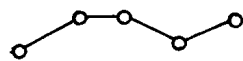
A. コ「レ」モ「ー」ー



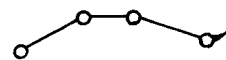
a. コ「レ」モ「ー」ー



B. コ「レ」モ「ー」ー



b. コ「レ」モ「ー」ー



- | | |
|---------------|---------------|
| 「 大きい上昇 | 」 大きい下降 |
| 「 小さい上昇 | 」 小さい下降 |
| 『 モーラ内での大きい上昇 | 』 モーラ内での大きい下降 |
| 『 モーラ内での小さい上昇 | 』 モーラ内での小さい下降 |

A, a, B, bは次のような分類に基づく。

A・Bは句末のモーラが2モーラ分延長されたもの。

a・bは句末のモーラが1モーラ分延長されたもの。

A・aは末尾の音調のくぼみの前にはっきりした下降を伴う。

B・bは音調のくぼみはあるが、その直前の下降は現われない。

A Bとa bは実のところははっきり区別できるものではない。実際の発話で

は2モーラ分のびたか1モーラ分のびたか判断しがたい場合もあり得る。共に一旦下降した後、軽い上昇を伴い、末尾の長音化した部分で音調のくぼみを形成する。長いA Bがより典型的なもの、短いa bがその軽いものといつてよい。

A aのくぼみの前の下降の位置は、原則的にはのぼされるモーラの直前(図1の例ではのぼされたモーラ「モ」の直前)である。また、その下降が十分に行なわれるために、のぼされるモーラの直前のモーラ(あるいは音節)は高い場合が多い(例では「レ」が高くなっている)。上昇の位置は、いわゆる句頭の音調や他のイントネーションの諸要素に関わり、一様ではない。はっきりした下降を持つA aのうち、Aの方は、特に大小2度下降することになるが、音調のくぼみにあたる最も低いところでは、その低いピッチ故に特殊な音色^{注1}(creaky or breathy voice)がしばしば聞かれる。aの方は、2度目の下降は聞こえず、最初に大きな音調の落ち込みがあった後、のぼされたモーラで少し上昇するだけである。特殊な音色は現われることもある。

Bの延長された部分の下降上昇はA同様、音調の幅は小さく、音調の小さなくぼみを形成するが、Aのような大きな下降がないため、このくぼみは高い音調から始まる。そのために、延長された部分が長くてもA aのような特殊な音色は現われない。bはBの末尾が圧縮されたもので、音調の谷間を形成しながら、末尾で上昇調が現われる。^{注3}

Aとa、Bとbの間が連続的であるのと同様、AとB、aとbの間も実は連続的である。典型的なA aには、くぼみの前にはっきりした下降が現われるが、実際の談話資料の中では、その下降がわずかで、B bとの区別がつきにくい場合もあり得る。すなわち、A・a、B・b、A・B、a・bの間には無数の段階があり得る。

くぼみの幅もまた無数の段階があり得る。ただ、一般には、さして(A aを特徴づける下降ほどには)大きくないのが普通であるが、このA～bまでに共通するくぼみこそが、この音調をそれならしめる本質的特徴である。

3 福井市方言

この節では、福井市方言の当該音調について、筆者の内省報告を行なう。

3.1 音声的実相

まず、この方言で重要なことは、前節で掲げた4タイプのうち、くぼみの

図 2

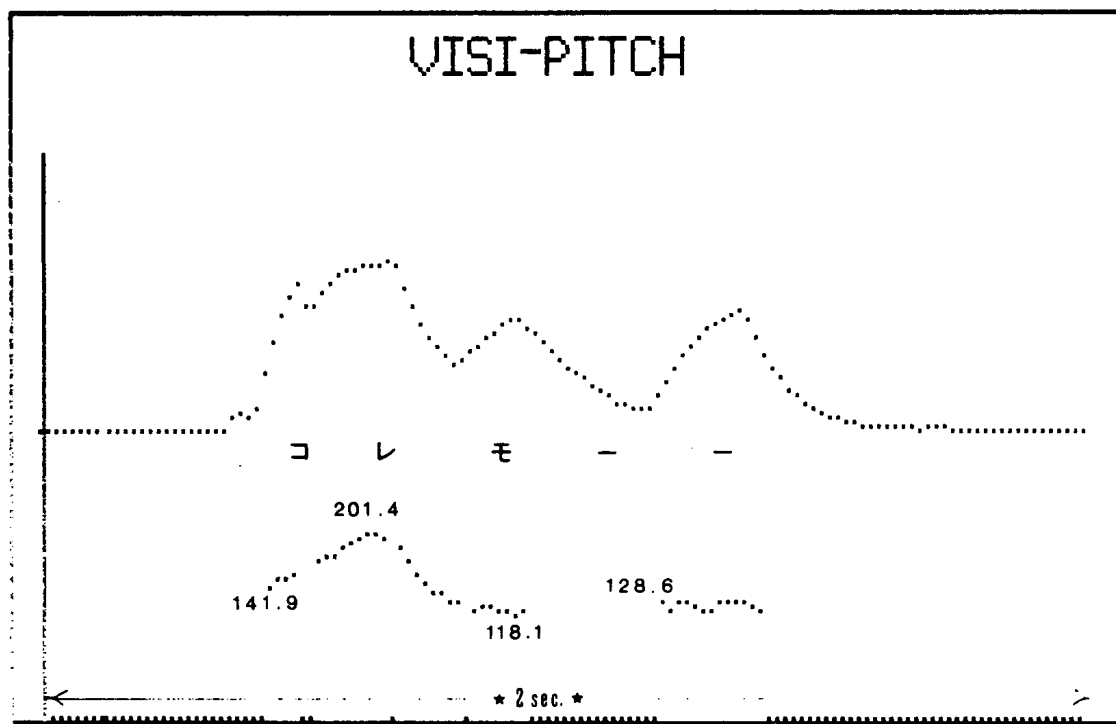
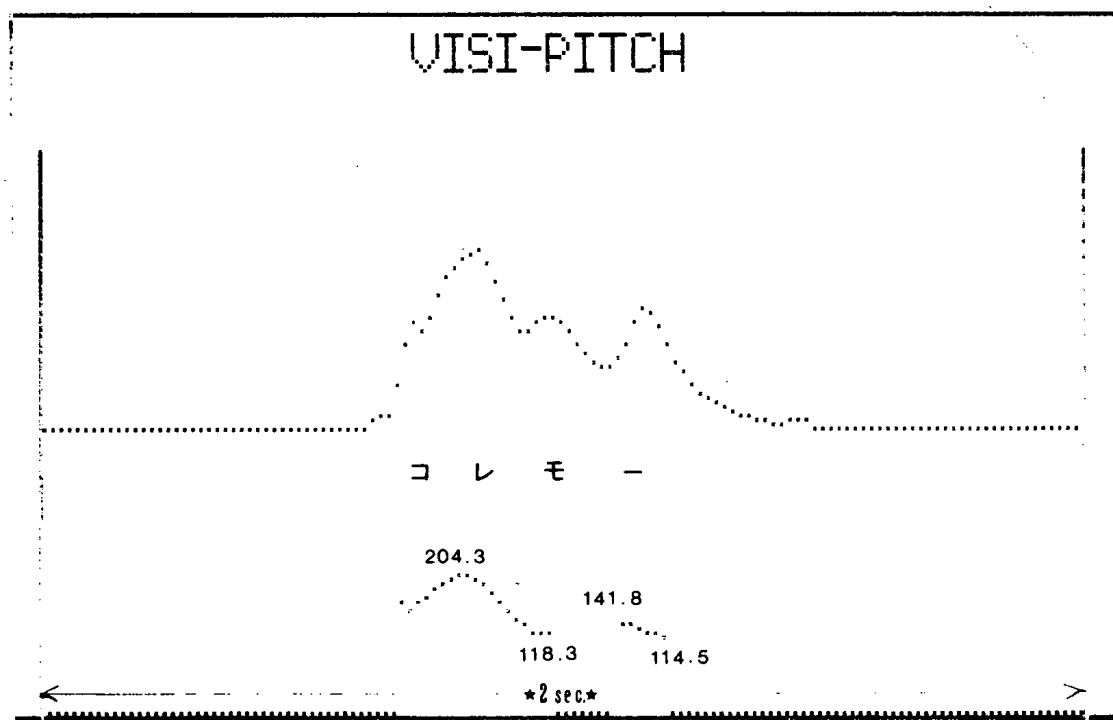


図 3



前の下降を伴う A a タイプのみが現われ、B b タイプはある例外的な場合を除いて現われないことである。

図 2・3 は、筆者自身の声を Kay 社の Visi-Pitch model 6095 にかけたものである。^{注4}「コレモ…」を A, a の 2 タイプで発音している。各々、上のカーブが強さ (intensity) の動き、下のカーブが (pitch) の動きを示す。そこに付された数字の単位は Hz である。

ピッチの変動の様子は、先に聴覚印象を視覚化した概念図、図 1 の A a に極めて近くなっているが、残念なことに、ピッチの最も低くなったと考えられる部分で、双方とも曲線が切れてしまっている。これは、発音者が最も典型的なものを実現しようとして、長音化部分の真ん中を creaky voice にしたためである。声のトーンは低くなったが、声帯の振動が不完全になったために、機械がとらえられなかったと考えられる。^{注6}しかし、これは過度に大げさな発音ではない。実際、現実の発話においても creaky (や breathy) voice は聞かれることがある。なお、図 3 では長音の末尾で自然下降が見られる。

強さの方は、母音の部分で山をつくりながら、ピッチと相俟って変動しており、ピッチが最も低いと内省される部分、すなわち音調のくぼみの部分では、強さもまた特に弱くなっている。このことは、自分の内省ではピッチの上げ下げと捉えていたものにも、強さの面が大きく関与していることを示している。おそらく現実には、先に述べた音色を含め、これらの特徴全体を聞いて、我々はその「ふし」の特殊性を認識しているのに違いない。

3.2 現われる位置

この音調は、可能性として、任意の文節末に現われ得る。

- (0) ショーガッコーニ#イルジブン#ガッコーノ#ニカイカラ#トビオリテ
#イッシューカンホド#コシオ#ヌカイト#コトガ#アル

〈小学校に居る時分、学校の二階から飛び降りて、一週間程腰を抜した事がある〉

それぞれ#の場所に現われ得る。これらが発話文内部のどこに現われやすいかは、文の構造そのものや、topic や focus などの言語的要因が絡んでいるかもしれないし、また、その全体的な頻度については、対人や置かれた場面によって選択される発話のスタイル、年齢や性やパーソナリティー等の発話者の属性に関する言語外的要因が絡んでいるかもしれない。これらは、今後解明すべき課題である(文中の切れ目との関係については、後に簡単に触れる)。

倒置，省略によって該当の文節が文末にたった場合にも現われ得る。倒置の場合，その音調形はaの亜種である。すなわち，のばされた部分の末尾は上昇調をとる（Aは稀）。

- (1) 「ナー」モ ワカ「ラン」 ヒ「トノコト」ワ「ー」
 (cf. ヒ「トノ コト」ワ「ー」 「ナー」モ ワカ「ラン」)
 <何も分からない，他人の事は>

省略の場合もAは稀である。文末に立った場合の末尾の上昇は，文中のものとはほぼ同じかやや上昇幅が大きいのである。

- (2) X. カ「ニデ イッパ」イ ヤリ「テ」ー 「ノ」ー
 Y. 「オ」ー 「クーツ」ト「ー」 ア「ツイ」ノ「ー」
 <蟹で一杯やりたいね。おお，クーツと熱いのを>

例文(1)(2)の中，'の印はポーズを示す。これは，この印の前の音調の上下関係を無効にしてしまい，その次に新たな「音調立て」を要求するものである。新たな「音調立て」とは，ほぼ「句頭の音調」と同じものであるが，「句頭の音調」の方は，句をおこす前に，音声連続の時間的な切れ目，すなわちポーズが必ずしもあるとは限らないのに対し，ここで言う新たな「音調立て」は，そういったポーズが必ずある場合の句頭の音調のことをいう。このくぼみ音調の後には，非常にしばしばポーズが現われ，また実際の休止の時間が短かくても，筆者の内省によれば一旦声門を閉じることが多い。その後で新たに句頭の音調を始める訳である。'はこのイントネーションに付随するものとして，後の例では逐一示さないことにする。

文末においても，この音調は現われることがある。ただし，断定のやという助動詞を伴う場合に限られる。これを伴ってこの音調が出るのは，<いいか

- (3) X. 「テンナカ」ニ「 ナニ モツテイルト オモ」ウ？
 Y. ワ「カ」ラン
 X. ケ「シゴム」ヤ「ー」 (ア)
 (cf. ケ「シゴム」ヤ「ー」 「エンピツ」ワ「ー」…) (イ)
 <手の中に何を持っていると思う。分からない。消しゴムだ>
 cf. <消しゴムや，鉛筆は…>

い、お聞き（ごらん）…だよ」というような相手に対して強く訴えかける場合である。

断定のヤの言い切りと並列の助詞ヤの言い続けとでは、音調面で、(ア)の方が(イ)よりも最後の上昇の幅がやや大きいことがある程度で、ほとんど違いは見あたらない。ただ、実際は(ア)の方は末尾に glottal stop が現われることが多いので、その場合には両者の区別ははっきりしている。

文末で、ヤ以外の助動詞やその他の助詞を伴う場合、また、それらが伴わない場合は、この音調は現われ得ず、従ってそれに伴う長音化も現われない。いくつか例を挙げておく。

ヤ以外で終わるときの例

疑問	コー「チャ」	ノム「カ（ノム「ケ）」
意志	コー「チャ」	ノ「モ」
勧誘	コー「チャ」	ノ「モ」サ
否定	コー「チャ」	ノ「マン」
推量	コー「チャ」	ノム「ヤ」ロ
命令(1)	コー「チャ」	ノ「メ」マ
命令(2)	コー「チャ」	ノミ「ネ」

3.3 定式化

福井市方言ではA aのみ現われ、くぼみの前の下降は義務的であることは先に述べたとおりである。次のように定式化される。

$$\begin{array}{c}
 \alpha \quad \beta \\
 (\bigcirc \dots) \uparrow (\bigcirc \dots) \bigcirc \downarrow \bigcirc (\uparrow R) \uparrow R \\
 \\
 (\bigcirc \dots) \quad \text{有無や数について任意のモーラ} \\
 R \quad \quad \text{延長されたモーラ}
 \end{array}$$

長音化しない前の姿の、末尾2つのモーラを $\alpha\beta$ とおく。図1のコレモのレモがそれにあたる。この式の最初の上昇は小さいときがある。また $\alpha\beta$ 間の下降も小さくなるときがあるが、2度目の下降（最初のRの前の下降）より大きいのが普通である。末尾の、上昇+Rは、Rのモーラ内で上昇することがある。Rが2つある場合でも、2つのRが一体となって低いところから緩やかに上昇することがある。また、相手に強く念を押すような言い方だと、最後のRの末尾でモーラ内の下降調をとることがあるが、これは更に別のイントネーションが被さったものと見るができる。

3.4 $\alpha\beta$ 間の下降について

$\alpha\beta$ 間の義務的な下降は α の語音の性質によって前にずれることがある。すなわち、 α がン（撥音）、ー（長音）、イ（ai, oi）のとき1モーラ分にずれる発音がある。これは東京方言をはじめとする多くの方言で見られるアクセント核と語音の関係と同じものである。それに対し、 α がこれらの語音であっても下降がずれない発音もあり、むしろこちらの方がより自然である。挙げる例はA型であるが、当然a型もある（以下ことわりのない場合、同様）。

- (1) 「バンㇿガㇿーㇿー , バㇿンㇿガㇿーㇿー <バンが>
「バㇿンガㇿーㇿー
- (2) 「ボーㇿガㇿーㇿー , ボㇿーㇿガㇿーㇿー <棒が>
「ボㇿーガㇿーㇿー
- (3) 「カイㇿガㇿーㇿー , カㇿイㇿガㇿーㇿー <貝が>
「カㇿイガㇿーㇿー

α が促音のときは、下降が前にずれているかもしれないし、ずれていないのかもしれない。促音のところまで高いかどうか、筆者の場合、内省がきかない。

- (4) 「ホㇿッデㇿー 「サㇿッキㇿー ただし、
- (5) 「ホㇿㇿデㇿー 「サㇿㇿキㇿー なのかもしれない。

ただ、 α が促音の場合で大事なことは、下降が後ろにずれる発音が稀ではあるが現われることである。

- (6) 「ホㇿㇿㇿーㇿー 「サㇿㇿㇿーㇿー

すなわち、実質はB型に近いものとなる。より長い余裕のあるBの方がよく出、bで言うのは非常に稀なような気がする。3.1の初めの部分で、例外的にB bが現われることがあると述べたのは、このことを指す。

α が無声化する環境のとき、

- (7) (〜ニ) イㇿキマㇿㇿトㇿーㇿー
(8) (〜ニ) イㇿキマㇿㇿトㇿーㇿー

の両方あり得るが、よく内省をはたらかせてみると(7)のようである。入念な発音では明らかに(7)である。

3.5 長音化されたRについて

長音化されたRの性質について、 β の語音の環境ごとに見てゆく。

β が撥音ン⁶のとき、Rは syllabic な鼻子音となるか、 α の母音が鼻音化したものとなる。

- | | |
|------------------------------|-------------|
| (1) [「pa ɾ ŋ ɾ : 「 :] | <パン (は、を) > |
| (2) [「pa ɾ ɰ ɾ : 「 :] | <パン (は、を) > |
| (3) [pi ɾ kuma ɾ ẽ ɾ : 「 :] | <肉マン> |
| (4) [a ɾ kibi ɾ i ɾ : 「 :] | <空ビン> |

(3), (4)はRが α の母音の性質に従った鼻母音になることの例である。また, (3), (4)にも, (1)のような syllabic な鼻子音が長音となるものがある。

$\alpha\beta$ が ai, oi のとき、Rは単に i の長音化したものである。

- | | |
|-----------------------|------------|
| (5) ア ɾ カ ɾ イ ɾ ー ɾ ー | <赤い (連体) > |
| (6) ア ɾ オ ɾ イ ɾ ー ɾ ー | <青い (連体) > |

β が長音の後半部に当たる場合、更に母音はのびる。(7)はA, (8)はaである。Aは可能ではあるが、やや不自然。

- | | |
|--------------------|------------|
| (7) 「ボ ɾ ー ɾ ー ɾ ー | <棒 (を、は) > |
| (8) 「ボ ɾ ー ɾ ー | <棒 (を、は) > |

(7)は「棒を」のa型とも取られやすい。が、「棒を」の場合、より典型的は、ボ ー ー ーのうち2番目の長音の前の下降は大きいのが普通であり、最初の長音の前(ボの後)で上昇を置くことができる。

長音で終わる外来語の場合、事情は少し複雑である。単語によっては、 $\alpha\beta$ 間の下降が1モーラ分前にずれ、本来の語末長音がA型のRの代わりをし、その結果そこに音調のくぼみがずれ込むことがある。東京方言でみられるような生産的な規則、すなわちアクセント核は語末から数えて3モーラ目(−3と表記)にあるという規則(−3がモーラ音素や無声化母音のとき前にずれて−4)^{注6}を受け入れようとする際そのような現象が生じる。単語に助詞等付さないで長音のままそこでくぼみ音調を行なおうとすると、アクセント核による「下げ」と $\alpha\beta$ 間の下降を一致させようとする作用が働く。

東 京	福 井
(9) /ケーブル「カー」/	「ケーブル「カ」ー「ー」
(10) /ラブレ「ター」/	ラ「ブレ「タ」ー「ー」
(11) /バルコ「ニー」/	バ「ルコ「ニ」ー「ー」
(12) /ウイス「キー」/	「ウイス「キ」ー「ー」
(13) /ダンブ「カー」/	「ダンブ「カ」ー「ー」
(14) /アダ「ブター」/	ア「ダブ「タ」ー「ー」
(15) /トラ「クター」/	ト「ラク「タ」ー「ー」
(16) /アナウ「ンサー」/	ア「ナウン「サ」ー「ー」
	ア「ナウ「ンサ」ー「ー」
(17) /スト「ーリー」/	ス「トー「リ」ー「ー」
	ス「ト「ーリ」ー「ー」
(18) /ピッ「チャー」/	「ピッ「チャ」ー「ー」

むろん、これらは全て定式どおりの発音も可能である。ただ、3モーラ分の長音が続くことに抵抗を覚えるのか、a型が普通である。定式どおりだと次の様になる。

- (9') 「ケーブルカ「ー」ー
 (10') ラ「ブレタ「ー」ー
 (11') バ「ルコニ「ー」ー
 (12') 「ウイスキ「ー」ー etc.

(9)と(9')「ケーブルカー」を例にとり更に説明を加えよう。

定式どおりの(9')では、音声連続ケーブルカーのうち、 α がカ、 β がその次の長音ー、上昇後の末尾のRが最後の長音で、a型の型どおりである。ところが(9)では、(9')の $\alpha\beta$ (カー)間の下降が、東京方言にある核(ケーブルカーのルとカの間の核)に影響されて、1つ前にずれ込み、それがちょうど核の役目を果しているかのように見せかけながら、その次にすぐ音調のくぼみを行なっている。その結果、(9)では、 $\alpha\beta$ はケーブルカーのうちルとカとなり、その次の長音は単語本来の長音だったが、長音化されたRのような働きをし、1モーラ分のびただけなのに、のばされたRが2つあるような外形をしている。つまり、定式の方から逆に見れば、あたかも「ケーブルカ」という単語があって、そのA型を実現させたような形になっている。(16)、(17)の各々2つの例のうち、後の例は、下降がモーラ音素の直後に立ったため、更に前にずれたものである。

外来語でも、上記の規則が適用されないと解釈して受け容れた語については、下降のずれも本来の長音がRの肩代わりをすることもない。

- (19) ×ブ「ラン」デ「ー」ー ○ブ「ランデ」ー「ー」 (／ブランドー／)
 (20) ×ド「ライ」ヤ「ー」ー ○ド「ライヤ」ー「ー」 (／ドライヤー／)
 (21) ×「ヨー」ヨ「ー」ー ○「ヨーヨ」ー「ー」 (／ヨーヨー／)

また、上記の規則が適用されるかどうかについては、必ずしも東京方言と一致しない。ただし、東京方言といっても一様ではないようだが。^{注7}

- | 福 井 | 東 京 |
|------------------|------------|
| (22) ア「レル」ギ「ー」ー | ／アレ「ルギー」／ |
| (23) カ「ウンセ」ラ「ー」ー | ／カウ「ンセラー」／ |
| (24) アク「セサ」リ「ー」ー | ／ア「クセサリー」／ |

漢語の場合、あるいは複合語の後部要素が漢語の場合についても、外来語と同様のことがいえる。^{注8}すなわち、-3（-3がモーラ音素の場合-4）にアクセント核を置く語の場合には、くぼみの前の義務的な下降が核の位置に1モーラ分ずれ、本来の語末長音がRの肩代わりをする。(26)は更に下降が前にずれる発音もある。

- | | |
|-------------------|---------|
| (23) ギャ「クユ」ニユ「ー」ー | <逆輸入> |
| (24) 「シンコ」キユ「ー」ー | <深呼吸> |
| (25) 「チューガッ」コ「ー」ー | <中学校> |
| (26) カ「トリセン」コ「ー」ー | <蚊取り線香> |

これらもまた全て定式どおりの併用をもつ。

いままであげた(7)～(26)の例は、筆者が受けた共通語化の影響に外ならない。というのは、共通語を話さなくてもよい場面で、文節末でくぼみ音調を用いない場合や、それが現われ得ない文節末以外の環境でも、上で示した「下げ」を行なうことがあるからである。更に、／アレ「ルギー」、カウ「ンセラー」、アクセサ「リー」／の発音は、共通語を話そうとしている場面でも使うおそれがある。むろん、これらについても、方言を話している場合、「下げ」を行なわない発音もある。「下げ」のあるものと無いものとのそれぞれについて、くぼみ音調を被せることができるため併用が生じるわけである。その中で、「下げ」を行なう場合、たまたま長音で終わっているので、くぼみの前の義務的な下降が、アクセント核による下降に引っ張られて全体が少しずれても、その帳尻を合わせられることになる。くぼみ音調のような“方言臭い言い回し”に共通語化の影響が顕在化する結果になったのは、義務的な下降とアクセント核の位

置が隣り合っていたことと、長音で終わっていたこととの条件が重なったからである。

3.6 間投助詞との共存

筆者は間投助詞ノまたはノーを用いる(ネ, ネーを用いないこともないが, その場合, 丁寧で共通語的, あるいはやや女性的な感じがする)。くぼみの音調に関して重要なことは, 1つの発話文において, それらが共存しないことである。より正確には, くぼみ音調の後に間投助詞が現われたり, 文節末に間投助詞を置いてその上にくぼみ音調を形成したりするようなことはない。いくら強く相手に訴えかけようとしても, 2つ重ねて間投的機能を強調することはできない。

3.7 他の音調との関係など

くぼみ音調が他の音調とどのような関係にあるか明確にするためには, 膨大な談話資料に基づいて分析がなされなければならない。基本的に現われ得るイントネーションの全てを把握し, その上で, 発話の意味内容, 文の構造等からそれぞれのイントネーションがどんなパターンで出現するか調べるのが正当な手段であろうかと思う。しかし, 現段階ではそこまでは到達していないので, ここでは今まで気付いている句を形作る音調に触れ, それらがくぼみ音調とどう関わっているかについて考察したい。

3.7.1 句切りの音調

ここで取り上げる句切りの音調は, ①句頭の音調, ②文節末卓立の音調, ③くぼみ音調と③'くぼみ音調の強いカタチ, である。また, ここでは, 句切とは逆の, 句をまとめるはたらきをもつ平らな音調連続についても触れる。順次説明してゆく。

①の句頭の音調は, いろいろな諸方言にみられるごく一般的なもの, 福井市方言においては, 概ね次の様なカタチをとる。

$$\textcircled{1} \quad \left\{ \begin{array}{ll} \textcircled{\text{O}} \textcircled{\text{r}} \textcircled{\text{O}} \dots \textcircled{\text{O}} \textcircled{\text{O}} & (\text{ア}) \\ \textcircled{\text{r}} \textcircled{\text{O}} \dots \textcircled{\text{O}} \textcircled{\text{O}} & (\text{イ}) \\ \textcircled{\text{O}} \textcircled{\text{O}} \textcircled{\text{r}} \dots \textcircled{\text{O}} \textcircled{\text{O}} & (\text{ウ}) \end{array} \right.$$

(イ)は第2モーラが撥音, 長音の後半, イの母音のとき, (ウ)は第2モーラが促音, 無声化母音のときに現われやすい。絶対的なものではないが, 語音の性

質から生じる普通の現象である。

さて、福井市方言には、藤原(1969, pp. 80—81)や吉田(1983, pp. 9—10)で指摘されているのと同様の、平らな音調の連続がある(アクセント核による影響がないため、このような音調連続が可能なのであろう)。平らな音調は、切れ目を示すのとは逆のはたらきをし、この音調が続いているときには切れ目がないという表示である。それが文節を越えてまたがるときには、文節どうしを結びつける統合機能をもっているといえる。この平らな音調と①の句頭の音調が同時に現われる場合には、①の頭から平らに続き、次の①の音調の手前までが1句となり、そのまとまりが明確に現われる。①は、句の頭をマークする方法で句切る、という境界表示機能を持つものといえる。

これとは別に、句の終わりを積極的にマークし、切れ目を表示する方法が、②の文節末卓立の音調である。平らな音調といっしょに現われた場合には、切れ目を表示すると同時にマークした所までのまとまりを示す機能をもつ。次のかたちをとる。

② …○「○」 ○…

音調が卓立した前後は、それに伴って平たい音調が現われることが多い。特に疑問の終助詞カや命令の終助詞ネ等を伴った形式でこの卓立音調を用いる場合、後半が連続して低く押えられる。また、この音調は上の①に被さって現われる。任意の文節末に現われ得るのは、くぼみ音調と同様である。まとまりを示す例を2つあげる。

- (3) ト「ナリノウチノコドモ」ノ「イヌ」 <「隣の家の子どもの」犬>
 (4) ト「ナリノウチ」ノ「コドモ」ノ「イヌ」 <「隣の家の子どもの」犬>

(3)の意味するところは <その犬は隣の家の子どもの所有である。犬は親犬かもしれないし仔犬かもしれない、そのことは限定できない。>である。(4)は <犬を所有しているのは、向いの家でも後ろの家でもない、隣の家の子どものである。> といった意味の他に、<隣の家が所有しているのは子どもの犬(すなわち仔犬)である。> という意味にもとれる。(3)では、(4)の後者の意味にはとれない。

さて、③のくぼみ音調は間投的機能の外に、②と同様の句を切るはたらきもある。くぼみ音調の後には、多くポーズがあることは先に述べたが、このポーズによって句は完全に切れてしまうのである。これが平らな音調と共に

用られると、(3), (4)で②についていえたことと同じことがいえる。

(3') ト「ナリノウチノコドモ」ノ「ー」ー イ「ヌ…

(4') ト「ナリノウチ」ノ「ー」ー ヨ「ドモノイヌ…

くぼみ音調は②と現われる位置もほぼ同じである。ただし、1つの発話文の中で共存することはあるが、同時に同じ文節末で行なうことはできない。また②のように卓立の後に、それに伴った低く平らな音調が連続することはない、ポーズがあって、その後に新しい音調立てが行なわれる。すなわち、次には①の句頭の音調が続く。

くぼみ音調を行なう際に、くぼみの前の義務的な下降の前が卓立することがある。これが③'のくぼみ音調の強いかたちにあたる。これは②とは別のものである。③'の卓立はその後の下降をより際立たせるためのものであって、それ自体が句の境界表示に積極的に関係している訳ではないからである。卓立は1音節ないし1モーラを単位とする。また、卓立の前まで低い音調が連続することがある。(5), (6)の例は卓立の単位が異なり、①が被さっている。

$\alpha \quad \beta$
③' (○…) (「○…) 「○」○ (「R) 「R

(5) 「ハン」シン」ト「ー」ー 「タイ」ヨ「ー」ト「ー」ー 「ナン
「カイ」ワ「ー」ー…

(6) 「ハンシ」ン」ト「ー」ー 「タイヨ」ー」ト「ー」ー 「ナン
カ「イ」ワ「ー」ー…
<阪神と大洋と南海は…>

ところで、③'は②と共に用いられることが多い。②③'の連続は非常に落ち着きが良く、発話文内の大きな切れ目に③', その句の前の句末に②を当てると間投効果が増大する。(7)での##は#より大きな切れ目を表わす。

(7) キンノノ#バンゲ#オソーニ##トーキョーニ#イッタラ##シン
カンセンガ#モノスン#オクレテ##ヨ「ー」ヨワッタ
<昨日の夜遅くに東京に行ったら、新幹線がものすごく遅れて大変困
った>

「キンノノ バン」ゲ」 オ「ソー」ニ「ー」ー 「トーキョー」ニ」
イッ「タ」ラ「ー」ー シンカンセン「ガ」 モノ「スン」 オク「レ
」テ「ー」ー 「ヨ「ー」ヨワッタ

3.7.2 文法的な切れ目と句切りの音調

今まで挙げた句切りの音調は、可能性としてはどの文節にも現われ得るものであるが、句切りが複数現われる場合、文や連文節内の文法的な切れ方に沿ったものでなければならない。

例えば、(7)の下線部を次のように行なうと不自然である。

(7') 「シンカンセンガ モノ「スン」 オク「レ」テ「ー

(7')の場合、初めの2文節が平らな音調によって結びつけられ、音調上それらが1句となって、シンカンセンガ モノスン / オクレテーと切れてしまい、連文節の中の文法的な切れ目（文節のまとまり）と抵触することになる。ところが、同じ3文節から成る連文節でも、前2つが更に小さい連文節を作っているものならば、(7')と同じようなイントネーションのパターンは自然である。

(8) …「シンカンセンノ ヒカリ「ガ」 オク「レ」テ「ー…

(9) …ア「タラシー シンカンセン「ガ」 オク「レ」テ「ー…

(8)(9)とも、前2文節が1句となり、その末尾に②が被さり、③'に連動しているといえる。

今度は、句切りの音調②と③（③'）どうしが、文法的な切れ目にかかわって、どのような関係にあるのか見てゆこう。

まず、連文節内の構造が違うもの2つを比べて考えてみる。

(7-0)、(8-0)では、#<##<###の順に文法的な切れ目が大きい。すなわち、(7-0)は後ろ2つがまとまっている連文節、(8-0)は前2つがまとまっている連文節である。共に末尾で大きく切れ、その後に何かの言表が続くと考えてもらいたい。

さて、もしこれら3つの文節の後で全てイントネーションによって句切るとしたら、どのような切り方が可能か、言いかえれば、切り方にどのような制限があるのだろうか。

結論から言ってしまうと、②③（③'）が同じ連文節で同時に用いられるときは、②は③（③'）よりも大きな切れ目に使ってはならないという制限がある。音調本来の側から見ても、②は句を単位としてポーズなしでもどんどん連続してゆくことが可能であるのに対し、③（③'）は、その後にポーズがあって、かなり大きな切れ目を作る。そのような本来的な性質からも、音調の切

(7-0) シンカンセンガ## モノスン# オクレテ###

(7-1) 「シンカンセン」ガ「ー モ「ノス」ン「ー オ「クレ」テ「ー
(③ ③ ③)

(7-2) 「シンカンセン」ガ「ー モノ「スン」 オク「レ」テ「ー
(③ ② ③')

(7-3) 「シンカンセン」ガ「 モノ「スン」 オク「レ」テ「ー
(② ② ③)

(7-4) 「シンカンセン」ガ「 モノ「ス」ン「ー オ「クレ」テ「ー
(② ③' ③)

(8-0) シンカンセンノ# ヒカリガ## オクレテ###

(8-1) 「シンカンセン」ノ「ー ヒ「カリ」ガ「ー オ「クレ」テ「ー
(③ ③ ③)

(8-2) 「シンカンセン」ノ「 ヒ「カリ」ガ「ー オ「クレ」テ「ー
(② ③ ③)

(8-3) 「シンカンセン」ノ「ー ヒ「カリ」ガ「 オク「レ」テ「ー
(③ ② ③')

(8-4) 「シンカンセン」ノ「 ヒ「カリ」ガ「 オク「レ」テ「ー
(② ② ③')

れ方にも大きさがあって、それが文法的な切れ方に適合したものでなければならぬといえよう。

具体的な例を見てみよう。例のうち上の方は、(7-4)が##のところ②、#に③'を当ててあるため不適當であるが、他は全て可能である。例の下の方では、同じ理由で(8-3)が不適當、(8-4)は制限にこそ抵触していないが、(7-3)の自然さに比べ、どうもしっくりこないものがある。後ろの2文節で②③'の連動パターンをとっているため、そこに統合機能を感じとっているのかもしれない。

以上、比較的単純な構造をもつものを例として見てきたが、文法構造とイントネーションの関係については、更に考えるべき点が多い。他の種類のイントネーションはどんなものがあるか、またその機能はどうかといったことや、それらの共起関係、もっと複雑な構造の場合など、更に豊富な例をあげて、考えてゆくべき問題である。

4 織田町笈松方言と武生市下中津原町方言

4.1 録音資料から

日本放送協会の『全国方言資料』(3)に収録されている福井県丹生郡織田町笈松方言(以下、織田町方言)は、自由会話1, 2とあいさつ(1. 朝, 2. 夕, 3. 道で, 4. 買い物, 5. 送り, 6. 迎え, 7. 不祝儀, 8. 祝儀)から成るが、自由会話とあいさつは録音時の状況が異なる。自由会話の方は文字通り自由で滞りなく話が進んでいるのに対し、あいさつの方は準備されたシナリオ(アドリブもあるかもしれない)があり、より自然な演技に努めていることが聞いた感じからうかがえる(ただし演技は申し分ない旨さである)。さて、この2種の録音資料から、筆者がここに間投イントネーションありと聞いたところは、その文字化された量の割合から見れば、実は自由会話より後半のあいさつの方に多い。またそこには典型的なものが多く含まれる。自由会話では、語法や語彙、音韻等の方言的特徴が多く出現することが期待されるが、かえってそのスムーズな流れが間投イントネーションを少なくしているように思える。その反面、演技を行なっているあいさつでは、話者がやや緊張して、間を保ちながら、語彙・語法の選択に慎重になっており、そのことが間投イントネーションを引き出す原因となったのではないと思われる。あいさつの部分は真の意味での自由談話ではないかもしれないが、考察の対象外とはしない。ここでは、話されている状況を考慮に入れたディスコースの分析を目的としているのではない。見たいのは、その段階以前の、音声的姿であり、それが現われる言語的環境がどのようなものであるかというだけである。演技として作られたものとはいえ、そこに間投イントネーションが現われているのはそれとして事実である。むしろ、より典型的なかたちで現われていることを大切に思いたい。

一方、武生市下中津原町方言(以下、武生市方言)の大量の資料は全て自由会話である。ここでも間投イントネーションは多く観察される。

前置きが長くなったが、各方言資料から、間投イントネーションが現われていると見たところを一部ピックアップしてみた。文字化はもとの『全国方言資料』(3)と『方言談話資料』(4)を参考にし、一部分書き改めたところがある。音調記号は筆者が付けた。それらの責任は全て筆者にある。下線部が間投イントネーションが現われている部分である。A, a, B, bの記号を付したが、一部判定が難しいところがあった(これらが連続的であることは先に述べた)。例文末の数字はテキストの頁を示す。

織田町笈松

- (1)…「イ」マ 「アンマリ」ラ「クナサケ」ー「ー」_B …(192)
 (2)ヨ「ナカ」ニ オキ「デア」ー「ー」_B (193)
 (3)「ソ」リヤ 「ハ」デ「ー」_a ム「カシ」ワ「ー」_a ソノ
 ナンジャノ…(193)
 (4)「ホヤケ」ド「ー」_a 「ウ」ラ「ー」_a イ「マ」ノ コ「ラ」ト
 チ「ゴ」デ…(196)
 (5)ア「メグレ」デ 「ネー」ン「ニヤ」ー「ー」_a 「ア」ノ「ー」_a …(196)
 (6)「ウイコト」ニ 「オータケ」ド「ー」_a ホイドカ…(198)
 (7)ホリヤ イ「マ」ワ「ー」_a ソンネ ウ「イコト」ニ
 ア「ワ」イデ「モ」ー「ー」_a …(198)
 (8)「ホッ」デ「ー」_a 「ナン」デモ 「コー」デア「ゲルン」ジャ「ー」_a
 (200)
 (9)…ネ「マッテナシテ」モ 「ノ」ー「ー」_a …(201)
 (10)「ウ」ラ 「キョ」ー「ー」_a ナ「カウチ ショート」…(206)
 (11)ロ「クナモ」ンデ 「ネ」ーデ「ス」ケ「ド」ー「ー」_a (206)
 (12)「イ」ヤ 「ウ」ラ イッ「デ」 「ミ」ルケ「ド」ー「ー」_a (207)
 (13)「ウ」ラー イー 「キョ」ー カッ「テッ」タ ク「ワ」オ「ー」_a
 …(208)
 (14)「イ」ヤ 「ホンナモ」ン イ「ラン」ガ「ー」_a (209)

武生市下中津原町

- (15)タ「ザエモン」ノー アノー「マ」チンキョ「ノ」 「ノ」 イ「マ」ノ
 オ「ババ」ノ「ー」_a ア「ネサン」デ「ー」_a
 「トーキョーカラ」ー マ「インナ」シテ「ー」_a …(30)
 (16)チョット チ「ラー」ツ「ト」ー「ー」_a ク「ギ」オ「ー」ー「ー」_A (31)
 (17)「オーサカヤマ」エ 「ノー」ー 「オーサカヤマ」エ「
 イッ」タ「デ」ー「ー」_a (38)
 (18)「アノー ヨー」タ「リ」ー「ー」_A 「ホンナ」 シ「ナラン」(43)
 (19)「ジョーズ」ニ「ー」ー「ー」_B 「モー」 ナ「カナカ」 ワ「ロテ」ワ「ー」_a
 ウ「タ」 ウ「ト」テワ…(43)
 (20)アノー 「マルカ」ノ「ー」_a アノ シ「ニナシタ」 ア「ジチ」ノ「ー」_a
 …(45)
 (21)「トニカク」 ワ「ラジ」 「ハイテ」『ー』_b 「キテ」『ー』_b …(49)
 (22)「イ」ヤ「ー」_a デ「ルツ」デ「ー」_a ソリヤ
 「ミョートサカズキ」ワ「シル」ケ「ド」ー「ー」_a (49)
 (23)「イツカメ」ニ「ー」ー「ー」_B アノ アノ オ「ヤモト」エ「ー」_a
 カ「エリマス」ン(51)
 (24)「サンガツ」ノ「ー」_a ア「レ」 「ジュ」ー
 「クンチャッタケド」…(67)
 (25)ゴ「タイソー」ノ「ー」_a アノー ノ ショーワノ ショーワノ(68)
 (26)アー オ「ボエテン」ケ「ド」ー「ー」_a アノー ハー「カカイシェン」
 ナッタト「キ」ニ「ー」_a …(81)

初めに、織田町方言から見てゆこう。

まず、目につくのは、福井市方言で現われなかったB型があることである((1)(2))。また、(9)は、間投助詞ノーに当該音調が被さっている(ここではノーのa型としたがノのB型の可能性もあり)。間投助詞と当該音調が共存している訳である。ただし、録音された資料の中で、間投助詞と共存しているのは、ここ一ヶ所だけである。(9)とその談話の前後はかなり早いテンポで話されており、一時的かつ突発的なものかもしれない。更い長い談話資料と話者の内省が欲しいところである。また、下線部で句頭の音調や間投イントネーションに伴う下降上昇以外の音調変動が(7)(11)(12)に見られる。織田町^{注10}笈松は、平山輝男(1953)の分布図から見ると、一型アクセントの地域か、平山氏のいう特殊音調の地域か微妙なところであるが、特に(7)(11)(12)に見られる下降をこの地にあるアクセントによるものと見るができるかもしれない。

今度は福井市方言と同じ点を掲げてみよう。数多く現われているaの音調形は福井市のそれとほぼ同じであることは言うまでもない。(5)の最初の下線部、(8)の後の下線部では断定の助動詞を伴って文末で現われている((5)の場合ンの前でニャ、(8)はやではなくジャだが)。また、(11)(12)(14)は省略によって文末に立った場合である。これらは福井市方言にも見られることである。

次に武生市方言を見てゆこう。

まず、違いが目につくのは、織田町方言の場合と同様、B型(ここではb型も)が見られることである((19)(21)(23))。^{注10}福井市方言と共通する点は、A aの音声実質の他に、それらが現われるパターンである。3.7.1の後半で、文節末卓立とくぼみ音調の強いかたち(②—③')の連動が、間投効果を強めることを述べたが、この方言においてもそれを見ることができる((17)(22))。なお(18)では単独で③'が現われている。また(17)は省略の例でもある。

4.3 諸説について

この論の最初に挙げた文献3点について気がついたことを述べてゆこう。

3氏の論文には各々次のような関係がある。すなわち、吉田(1983)には藤原(1969)の言及があり、山口(1985)には両氏の論文への言及がある。またその前年に出版された同氏の「福井市郊外の二型アクセント」(『方言研究年報』第27巻、広島方言研究所編、和泉書院、1984)には、吉田(1983)の内容と笈松方言への言及が含まれている。なお、吉田氏、山口氏が言及している先駆的研究である藤原(1969)は、織田町方言を扱っており、その字^{あざ}までは特定していないが、吉田(1983)で扱われている笈松方言と大差はない

と思われる。

まず、織田町方言について、藤原氏の論文から順に見てゆこう。

藤原氏の論文では、「ゆすりアクセント」は次の2種があるという。(原文縦書。それぞれのタイプにつけられたIの中の小分類a, b, cと後の例の(III)の記号は山口氏の分類による。藤原氏の例の末尾につけられた(1)~(12)の番号は新田による)

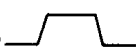
- I a.  
 b.  
 c.  

注 右の○印は音節を示す。 は、「話部末または文末」の意。

の場合、その音節の母音はいくらか伸びる。の場合、「.....サケー、」のように、調音部の後半でのおこることもある。

- II   

注 これは、文末または話部末でこのような高音隆起のおこることを示す。

——1種の「あとあがり」調にほかならない。ただ、注意すべきは、当方言での場合、文末または話部末に長呼母音のあるところに、—その延伸母音上に、または延伸音を含む1まとまりのもののうえに、の形式のおこることである。いかにも「ゆすり」の名にふさわしいことである。

藤原氏が挙げる例には次のようなものがある (共通語訳は略)。

- I a コレ ドコノ コヤロ。(1)
 ヨンヒャクエン オカエシシマスデ。(2)
 カーチャン ガ。(3)
 I b イッカイ スルトー。(4)
 ...ユーンジャサケー。(5)
 I c ノクトテ エー ケドー。(6)
 インノジャー。(7)
 II オキャクサンモ、ヨバレテ
 カエンナル トキ ニー。(8)
 ホンノ オタコトバヤデー。(9)
 (III) バンナラーアー。(10)
 ホンデーエー。(11)
 アノーオー。(12)

(1)~(12)の例のうち、筆者が藤原氏の記述から音調を復元し発音してみたとき、間投のイントネーションが現われている、あるいはそれらしく思われる、というものは、(6), (7), (10), (11), (12)である((3), (4)もか?)。その他のものについては、山口氏のいわれる「句末の上昇」の一部としか読み取ることができない。筆者がくぼみ音調と名付け、北陸独特のものだとしたものは、藤原氏が認められるものより、限定されたものなのかもしれない。2種あるといわれる分類の規準も大きく異っており、I, IIの両タイプでは、筆者の思う特徴のうち、長音化と「あと上がり」という点のみが共通している。藤原氏のIでは、くぼみを作る前半の下降について触れられておらず、IIでは、音調型が台形の山型を形作り、筆者の内省や織田町笈松方言を聞いた感じとは正反対になっている。藤原氏の観察では、(10)~(12)で見られるような3モーラ分のびるかたちがあることを認めるから、台形の音調型を被せることが可能で、2モーラ分の延長しか認めない筆者からすれば、最後の長音化部分を切ってしまった、 $\overline{\text{バンナラア}}$, $\overline{\text{ホンデーエ}}$, $\overline{\text{アノーオ}}$ というかたちならば、織田町で現われ得るものだと思われてならないのである。

吉田氏(1983)での「ゆすり」調は、藤原氏のIIタイプを踏襲したものといえる。次のかたちをとるといふ。

.....○-「V」-

.....○-「V」-

(○は末尾音節, -は長呼音, Vは母音音節, , と。はそれぞれ, 話部末と文末をあらわす。)

いわば3モーラ分の延長を認め、長音化中央部分の高い山型音調が被さっていると見ている訳である。先に述べたように、筆者がテープから聞いたものは、せいぜい2モーラ分の延長であり、また山型とは逆形のくぼみ音調である。更に吉田氏の挙げられた5つの例(番号は原文のまま), すなわち,

⑩ (前略) メ「ロノ ホーンニ」モ ノー「オ」-

⑬ 「ホ」ッデー「エ」- (後略)

⑭ (前略) ピ「チャー」ット ネ「マッテナ」シテモ ノー「オ」-

⑮ (前略) 「ナー」モ シ「ラ」ンニャケー「エ」- (後略)

⑯ キ「メテ」タンニャ モネー「エ」-

のうち、筆者が間投イントネーションを有すると聞いたのは、⑬と⑭のみである(その部分での音調の付け方が異なっているのは言うまでもない)。吉田

氏の認められる「ゆすり」調と筆者のくぼみ音調とは、その認定の仕方も、従って、またその範囲も異なっている可能性がある。吉田氏は藤原氏のIIを特に「ゆすり」調とされたが、筆者のものは更にそれより限定されているのかもしれない。

山口(1985)では、藤原氏、吉田氏の論文について言及されている。山口氏はその中で、「北陸路方言に共通する話題の特有のイントネーション」は、藤原氏のIIのタイプの一部(これにⅢという記号を当てた)であり、吉田氏が藤原氏のIIとして取り出された「ゆすり」調は、その具体例から藤原氏のⅢであるとしている。そして、藤原氏のI a~c, IIのⅢ以外のものは全て「句末の上昇」または「卓立下降」であると断じている。ここでの山口説は、後の武生市方言でもそうであるが、間投のイントネーションの特徴として、末尾の上昇を1例を除き認めていないため、句末の上昇の記述のあるものは全て一般的な「句末の上昇」の仲間に組み入れざるを得なかったと考えられる。藤原氏のI・IIの分類法の是否はともかく、Ⅲ以外のものの中にも、間投イントネーションと読み取れるものもあると筆者は考える。また、逆に上昇のないもの、例えば音調の山型をとるとした吉田氏の「ゆすり」調の例に対しては、全て「北陸路特有」のものと認定しているようである。

吉田論文の翌年に出られた、山口(1984)でも筈松方言の間投イントネーションとして、/.....○ー「V」ー/ (誤植訂正)の形を認めている。ただ、山口氏によれば、これには2種類あるという。

a /.....○「V」ー/

b /.....○「V」ー/ (a, bは原文では立体, 筆者のa, b型と区別するため)

3モーラ分の延長を認めていることを別にすれば、a, bの区別は筆者のB, Aに相当することになる。またこの山口論文には、「aとbの違いは、たぶん単語のアクセント<0>と<N>に由来するとみられる^{注11}」(p. 221)と述べられている。これは卓見といわなければならない。一型アクセント地域である福井市方言はA(a)の1タイプしか持っておらず、市の中心からはずれた地域にAB(a b)の両形が見られることから、このことは十分に考え得ることだと思う(これについては後述)。

次に武生市方言についての山口氏の論考を見てみよう。山口氏がここでいわれる間投イントネーションは、北陸路特有のもの他に「句末卓立下降」などを含むやや広い幅をもつ。まず、長音化に関しては、この方言では、「独立長音化」(2モーラ分延びる)と「単純長音化」(1モーラ分延びる)だけ

を認め、「再長音化」(3 モーラ分延びる)ものを認めていない。このことは筆者の意見と一致する。だが、北陸特有のものであるイントネーションの音調形については、筆者の録音テープからの観察とは異っている。山口論文の pp. 219—211 の例から、どのタイプが北陸路特有のものか明言されていないが、「発音自体がむつかしい」とされる 1 b と 2 c, 2 d あたりが筆者のくぼみ音調にあたるのではないかと想像される。それは次のような音調形をとるという。

- 1 b ~] O] — 〈単純段落下降〉
- 2 c ~ [O] V] — 〈句末卓立再下降〉
- 2 d ~ O] V] — 〈句末段落下降〉

もし、これらが北陸独特の間投イントネーションだとすると、筆者の記述とは末尾の音調の認定の点で、大きく異なることになる。山口論文で挙げられている例を、筆者自身で、氏の記述どおり 2 度の下降で行なうと、どうしてもそこで言い切ってしまうような音調になって、次に話をつなげてゆく感じがさっぱりしないのはどうしたことであろうか。それに対し、2 度目の下降をほんの少し上昇する音調になおすと、北陸特有のイントネーションに近くなるように思える。その修正がもし許されるとすれば、山口氏の 1 b は筆者の a 型に、2 c, 2 d は B 型に近いものとなる。また 2 a として挙げたものの大部分は、iv の例を除き、A 型に近いものとなる (共通語訳は略)。

- 2 a. ~ O V] — 〈独立順接下降〉
 - i. ム「ラゼンブ」ガア] — ii. タ「チマス」デエ] —
 - iii. ス「ギノ」キ オ「レマ」シテエ] —
 - iv. ウ「ミビラキシマ」シタデエ] —
 - v. コ「ドモントキ」ワア] —
 - vi. ワ「タッテキマ」シタン] カア] —
 - vii. ~ ヒド] — ゴザイマス] デエ] — viii. ア「リマ」シテエ] —

なお、vi の疑問文でこの音調が現われているのは福井市方言と異なる。

5 金沢市方言

金沢市方言にも、この種のイントネーションがあることは知られているが、記述を試みたものは管見の及ぶ限りない。この節では、金沢市生え抜きの若い話者(男、昭和 37 年生まれ)を調査した結果に基づき、福井市方言との違い

いを中心に述べる。

違いの第1点は、金沢市方言ではアクセントの影響下でこのイントネーションが現われることである。金沢市方言のアクセントは、語音の性質に制約を受けながらも「下げ核」の $P_n = n + 1$ の体系をもつ（上野・新田 1983）。アクセントの下降の約束を守りながら、長音化し、またこの独特のイントネーションが被さってゆくのである。長音化には、福井市方言同様、2モーラ分のびる長いタイプと1モーラ分のびる短いタイプがあり、音調の変動についても、長音部にかかる音調のくぼみを特徴とする。例をあげよう。

／クㇿギ／	＜釘＞		
「クㇿギガ	「クㇿギガㇿー「ー	「クㇿギガ「ー	
／コレㇿ／	＜これ＞		
コ「レㇿガ	コ「レㇿガㇿー「ー	コ「レㇿガ「ー	
／カタ／	＜肩＞		
カ「タガ	カ「タガㇿー「ー	カ「タガㇿー	
／クㇿルマ／	＜車＞		
「クㇿルマガ	「クㇿルマガㇿー「ー	「クㇿルマガ「ー	
／アタㇿマ／	＜頭＞		
ア「タㇿマガ	ア「タㇿマガㇿー「ー	ア「タㇿマガ「ー	
／オトナㇿ／	＜大人＞		
オ「トナㇿガ	オ「トナㇿガㇿー「ー	オ「トナㇿガ「ー	
／セナカ／	＜背中＞		
セ「ナカガ	セ「ナカガㇿー「ー	セ「ナカガㇿー	

無核の〈肩〉、〈背中〉のくぼみ音調の短いタイプでは、末尾の上昇調の直前の下降が聞こえないことがある。また、すべての例の末尾でわずかなモーラ内下降が聞かれることがある。

第2にあげておきたい金沢市方言の特徴は、間投助詞と共存するということである。この場合、2つのタイプがあって、ア) このイントネーションを行なった後に間投助詞ネを添えるものと、イ) 間投助詞ネそのものにこのイントネーションを被せるものである。

ア) の場合、間投助詞の前の上昇は、それを付けないものより大きいのが普通である。『は「のときもある。また、ネは低く下がつて付く。更にそのネがモーラ内下降をもつことがある。イ) では、ネーの始まりが低いのが普通のようなのだ。

ア) 間投助詞ネの前をゆらす。

「ク」ギガ「ー」ネ	「ク」ギガ「ー」ネ
コ「レ」ガ「ー」ネ	コ「レ」ガ「ー」ネ
カ「タ」ガ「ー」ネ	カ「タ」ガ「ー」ネ

イ) 間投助詞ネそのものをゆらす。

「ク」ギガ	「ネ」ー「ー」
コ「レ」ガ	「ネ」ー「ー」
カ「タ」ガ	「ネ」ー「ー」

話者によれば、イ) のタイプはア) よりも古いものだという。

「ホ」ンデ	「ネ」ー「ー」
「ホ」ンデ	「ー」ネ

の2つについて、彼の祖母(明治36年、金沢市生まれ)に確めたところ、言うとしたら前者しか言わないという。また、更に筆者は、前半が低く平らで後部の上昇下降を残しただけの、

ホンデー	「ー」ネ
エットー	「ー」ネ

をよく耳にする。特に若い人に多く聞かれる。これらひとまとまりで、1つの間投詞として機能しているものと思われる。

第3にあげるべき特徴は、金沢市方言では長音化した鼻母音に制限があるということである。金沢市方言でも、ンが文節末にきた場合のくぼみ音調の形成法は、福井市方言と同様に syllabic な鼻子音を長音化させる方法と、ンの前の母音と鼻母音にして長音化させる方法との2通りあるが、そのうち鼻母音の現われ方に制限がある。語例とともに次の表にして示す。

syllabic な鼻子音による形成法では、ンの前の母音の広狭や核の有無にかかわらず、全てについて可能であるのに対し、鼻母音の形成法では、長音が狭母音の場合不可であり、母音が広くても無核の場合、可不可の判定は微妙となる。母音が狭い場合については、i, u は高母音でもあり、奥舌面が盛り上がり^{注12}上がっているため、口蓋帆の開きがスムーズにいきにくいという原因が考え得る。無核がなりにくいのは、高い音調から更に上昇してゆかなければならないことと関係があるのだろうか、はっきりしたことは言えない。

ここであげた例は2モーラ語だけであるが、3モーラ語以上についても、ンの前の母音の性質と無核かどうかに関係するのではないと思われる。

	N :	V :
/W ^ㄣ ン/	○	○
/W ン/	○	○×(?)
/N ^ㄣ ン/	○	×
/N ン/	○	×

Wは母音が広いモーラ、Nは母音が狭いモーラを表わす。

- /W^ㄣン/ 缶、棧、タン（肉）、難、判、癌、円、剣、線、点、面（表裏）、ペン、恩、紺、損、トン（重さ）、本、門、四、論etc.
 /W ン/ 館、感、啖、願（をかける）、縁（がある）、辺、面（剣道）音、来ん（連体）、紋、盆（器） etc.
 /N^ㄣン/ イン（印、犬）、金、ちん（犬）、燐、銀、ジン（酒）、瓶、ピン etc.
 /N ン/ 着ん（連体）、芯、品、見ん（連体）、鈴、運 etc.

6 方言間の差異について

今まで取り上げてきた4つの方言についてどのような差異が見られたかここでまとめてみよう。

	武生市	織田町	福井市	金沢市
ABの型	A (B)	A (B)	A	B
アクセントの影響	なし	あり?	なし	あり
間投助詞との共存	しない	する?	しない	する

ここでの「ABの型」にはそれぞれa b型も含まれる。武生市のBはAよりやや稀であり、織田町の場合もBの現われ方が少ないため、括弧に入れた。もっと多くの談話資料を調べるとこの括弧ははずれるかもしれない。織田町は、一型アクセントか曖昧アクセント（最近の研究では二型アクセント）か微妙な地域であり、その現われにアクセントらしいものが認められたが、テープ資料からだけでは、具体的にはどのような影響があるのか未詳である。また、1例のみ間投助詞と共存しているものがあるが、金沢市方言のように確立しているものであるか未詳である。金沢市方言をB型としたのは、福井市方言のような義務的な下降がないためである。無核の/カタ、セナカ/に現われたものを「はだかの形」として重視したことになる。なお、金沢市方言で見られた鼻母音の制約については、武生市、織田町ともに不明である。

7 終わりに

論を閉じるにあたって、この考察における残された問題点をあげておこう。

まず、この間投イントネーションの共時的な姿について、まだまだ情報が不足しているということがあげられる。タイプの違う他の方言の姿がどんどん明らかになれば、それらの共通点や差異などを検討し、その本質に迫ることができる。その際、差異の項目も増し、各方言の特徴づけが容易になるであろう。福井人として常を感じる疑問、すなわち、石川県、富山県にもよく似た音調があるが、どうも自分のものとは少し違っている、この違いはいったい何なのだろうか、といった疑問が、各方言が持つ諸特徴の束で、すっきり説明できればと思う。

それに関連して、この現象の地理的拡がりも捉えておくべき問題であろう。イントネーションを対象とした言語地理学的研究を筆者は知らないが、この音調は方言間の系統関係を越えて拡がり、かつまた拡がりつつあるものと思われ、言語地理学のうってつけの材料ではないかと思われる。筆者は、東は富山県滑川市(入善町では使わないという学生の報告あり)、西は福井県名田庄村で使用されているのを知っているが、それより^北外の地域でも使用されている可能性が高い。特に北陸各県東部南部の山間部についての知識が乏しい。言語地理学的調査を行なう前には、各方言と世代間でヴァリエーションが認められるので、それらの概要を知り、どの特徴に注目すべきか考慮しておく必要がある。

次にあげられるのは、このイントネーションの通時的側面である。先に述べた言語地理学的研究でも最終的には扱わなければならない問題である。このイントネーションは由来は何か、また方言間の差異はどのようにして生まれたのかなど明らかにすべきことが多い。

先にあげたように、通時的な側面について、初めて言及した山口氏の意見には鋭いものがある。織田町方言を「二型アクセント」とした上で、筆者のいうA型B型のうち、Aの方の下降をアクセントによる下降とした点がそれである。この論の4.1であげた(1)~(14)の織田町方言の例のうち、間投イントネーションが被さった金田一語彙は「昔(は)、今(は)、今日」の3語であるが、これらは3語ともA型(実際はa)で現われている。一方、山口氏が調査された福井市郊外の成願寺町の結果では、それら3語は全て有核の《N》となっており、この点ではA型=《N》で一致している訳である(織田町の例(13)鋤ヲもA型であらわれ、「鋤」は1類の語であり、山口氏によれば

1類は《N》に対応するようであるから、この語も含めてよいかもしれない)。つまり、B型についての照合が十分でないので明言をさけるが、少なくとも「昔、今、今日、(鍬)」については、くぼみの前の下降はアクセントに由来する下降であるという可能性は否定しきれるものではないのである。

他方、一型アクセントといわれる武生市方言でも、A、Bの2種類が現われているという事実は、武生市方言が、過去において二型アクセントであったことを示唆するものではあるまいか。あるいは、語彙によってA Bの現われ方がかなり固定しているものであるならば、このイントネーションを被せることによって、見えていなかったアクセントの区別が引き出されるのではないか、などと思えてくる。

この考えでゆくと、福井市方言の間投イントネーションの義務的な下降も、アクセントの核に由来するといえるかもしれない。二型アクセントが有核に統合した時の下降が $\alpha\beta$ 間の下降になったという解釈である。ただ、共時的には、この下降はアクセントの下降とする訳にはいかならないと思う。筆者の場合、間投イントネーションを用いないとき、あらゆる語について無核のように下がり目なしで言ってもかまわないし、また複数の文節が連なって、1句に発音されるときでも、下降が加わる必要がないのに対し、間投イントネーションは常にどんな場合でも下降を伴わなければならないからである。

共時的な解釈はともかく、各方言のA Bのタイプとアクセントの影響の有無は、深いところでつながっている可能性がある。一型アクセントの中心地、福井市でAのみ、その周辺でAとB(Bの数は少ないが)、最もアクセントが明瞭でその弁別性が発揮される金沢市でB(これは長音化部分というアクセントに差し障りのないところでイントネーションの音調変化が起こる)のみが現われるという事実の意味するところは大きいといえよう。

また、間投助詞との共存は古いものか新しいものかなど、通時的な問題は山積み状態にあるといえよう。

[注]

- (1) 音声学の教科書である Ladefoged, P. (1982²) *A Course in Phonetics*. New York : Harcourt Brace Jovanovich. のp. 226には、creaky voice が低ピッチを持っていることが書かれている。
- (2) カギを大小2つ書き分けようとした最初の動機は、当該音調のわずかな下降上昇を記述しなければ、それらしく表わせないと思ったからである。また、筆者が最大限聞きわけ可能な変動はせいぜい2段階程度で、それ以上は無理である。ここで取り上げる方言のイントネーションにおいて、上昇下降の動きのみが重要であるということは未だ

証明されておらず、もし仮にそうであっても、それが明らかにされてからでも、2段階をやめるのは遅くはないと思う。初めはできるだけ詳しく記述しておいて、非関与的特徴は後から取りできればよい。

- (3) Aの末尾をどんどん短かくするとaになり、Bの末尾を短かくするとbになる。ところが、Aのレの後の下降を小さくしていくとBになるが、aの下降を小さくし、無くしてしまうとbという形にはならない。この不均衡は、このモデルが構造的に抱えるものである。この図では、bはaの下降をなくしたものとせず、音調のくぼみを大切にし、Bの圧縮されたものとして見てゆく。
- (4) 東京大学文学部言語学研究室のを使わせていただいた。便宜をはかっていただいた上野善道助教授と豊島正之助手（当時）に感謝申し上げる。
- (5) Ladefoged, P. (1982²). p. 128 には、creaky voice が発せられた時の声帯の写真がある。また同書の説明では、'... the arytenoid cartilages are tightly together, so that the vocal cords can vibrate only at the other end. This is a very low pitched sound that occurs at the ends of falling intonations for some speakers of English.' (p. 129) とある。
- (6) 金田一春彦監修，秋永一枝編『明解日本語アクセント辞典』（第二版，三省堂）の「アクセント習得法則」14 による。
- (7) 柴田武監修，馬瀬良雄・佐藤亮一編『東京語のアクセント資料（上・下）』（1985，2）を見ると東京方言といっても一様でないことがわかる。ちなみに、筆者があげた「ブランディー，ドライヤー，アレルギー，カウンセラー，アクセサリー」は東京語ではどのようなになっているか引用してみよう。（4つの辞典類も21人の個人のデータも併用形も各々1つと数えたものが右の数字，左の○数字はアクセント核の位置である。）
 - (19) ブランデ(イ)ー ①……18, ②……9
 - (20) ドライヤー ①……17, ②……8, ③……1
 - (22) アレルギー ②……17, ③……14
 - (23) カウンセラー ①……8, ②……12, ③……1(!), ④……5, ⑤……1
 - (24) アクセサリー ①……18, ③……15, ④……1
- (8) 話を外来語と漢語に限っていたのは、長音で終わる和語がほとんどないためである。ただ、日常使う語として、「～相撲」という例は、この音調が現われるものに該当する。例えば、「腕相撲，指相撲，四つ相撲」など。
- (9) 低い音調が連続する例（疑問の場合）をあげる。

- (1) 「コーチャ「ノ」ハコ「カ
- (2) 「コーチャノハイッ「タ」ハコ「カ
- (3) 「コーチャノハイッテ「タ」ハコ「カ
- (4) 「コーチャノハイッテタキレー「ナ」ハコ「カ
- (5) 「コー「チャ」ノム「カ
- (6) 「コー「チャ」ノマン「カ
- (7) 「コー「チャ」ノマンノ「カ

- (8) 「コー「チャ「ノマンノヤッテ「カ
 (9) 「コー「チャ「ノマンノヤッチュンニヤッテ「カ
 (10) 「コー「チャ「ノマンコトモネーツチュンニヤッテ「カ

- (10) この方言の話し手である加藤和夫氏によれば、筆者のB bは確かに存在するという。
 (11) 山口氏によれば、福井市郊外の「三国式アクセント」は二型アクセントで、次の音調形をもつという。

＜0＞ ○「▷, ○「○～○「○▷, ○「○○～○「○○▷, ……

＜N＞ 「○▷, 「○▷○～○「○▷, ○「○▷○～○「○○▷, ……

すなわち、下がり目のない＜0＞と－1に下がり目をもつ＜N＞の2種類しかない。

- (12) 高母音と口蓋帆の関係については、上野善道氏の御教示による。

〔引用文献〕(本文、注で題名をあげなかったもの)

上野善道・新田哲夫(1983)「金沢方言の名詞のアクセントーアクセント体系と所属語彙」
 『国語研究』45

平山輝男(1953)「福井県嶺北方言の音調とその境界線・その1」『音声学会会報』83

〔付記〕

この稿は、第12回一型アクセント研究会(1986. 5. 24, 於：国立国語研究所)で口頭発表した内容に加筆・訂正したものである。会場で有益な御意見を賜った方々に感謝いたします。

この稿の福井市方言と金沢市方言の例文については、録音テープが用意されている。入手希望の方は下記の宛て先にカセットテープ1本と返送用切手を同封の上、お申し込み下さい。ダビングして折り返しお送りいたします。

〒920 金沢市丸ノ内1-1 金沢大学文学部言語学研究室気付 新田まで